



知っておきたい アレルギーの話

NPO法人アレルギーを考える母の会
代表 園部まり子

第20回

被災地の患者の方々は…

アトピーのケア、周囲の 目が気になるアパートへ

東日本大震災で亡くなられた方々、被災した方々に、心よりのお悔やみ、お見舞いを申し上げます。

大震災に際して、「母の会」にできることは何かと考えた時、やはりアレルギーの病気の方々、子どもたちを支援することだと思いました。もちろん現地で活動されているNPOなどもあり、微々たる力の「母の会」に何ができるのかという思いはありました。4月はじめ、仙台市と周辺の被災地を訪れました。仙台に到着した直後には震度6強の余震にも遭い、災害が進行中であることを思い知らされました。

現地では3人の専門医の先生方と

会い、避難所3カ所を訪問して運営にあたる行政の方々、全国から派遣されている保健師の方々と意見を交換、患者さんともお話しすることができました。

ある避難所では床に敷きっぱなしの布団・毛布のホコリで鼻炎が悪化しているのに薬もなく寝たまま過ごす青年に、簡単にできる鼻洗いの方法をお伝えしました。避難所には定期的に医師が訪れていましたが、アレルギーの患者さんたちは、「自分よりもっと大変な人がいる」と思う人が多く、声を上げていない様子でした。専門医によると、被災地では喘息の発作を起こす人が増えているとのことでした。また、アトピー性皮膚炎のスキンケアのために、避難所で毎日の入浴を許可してもらった

ものの周囲の目が気になり、なげなしのお金をはたいて借りたアパートに移らざるを得なかったという親子にも出会いました。

専門知識をもった看護師 などと相談できる仕組みを

復旧復興にあたって指摘されている課題に市町村の行政力の低下があります。避難所を運営する中で被災者個別のニーズに因應するのが難しい事情もわかります。その中で、必要な支援をどう届けるのか、私がかかわれるアレルギー疾患分野で電話などによる公的な相談システムや専門医による巡回相談、アレルギーの専門知識をもった看護師による相談などができないか、提案していきたくと思っています。



そのべ・まり子 ● 神奈川県社会福祉協議会セルフヘルプ支援事業運営委員。困っている患者と専門医との橋渡しを第一に「治療ガイドライン」情報などの提供、専門医による講演会や会報発行、行政への働きかけを行なっている。共著に『食物アレルギーの手びき 改訂第2版』（南江堂刊）。